



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

特集 太陽とわたし

vol. **32** | 季刊 **夏**
2014



CONTENTS

INAXライブミュージアム
NEWS
LETTER

vol.32 | 季刊 夏
2014

表紙写真

北海道と東北から仕事で常滑にやって来た3人。「これなあに?」と「身長時計」に興味津々。太陽の光のできる自分の影がおよその今の時間を示します。仕事の合間、ミュージアムを楽しんでいただけでしょか。

(2014.5.18)
撮影: 藤枝彩子

01 [特集] 太陽とわたし

LIVE REPORT

06 開催報告

企画展 手のひらの太陽
——「時を知る、位置を知る、姿を残す」道具

07 企画展 タイルが伝える物語 ——図像の謎解き

LIVE SCHEDULE

08 これからの催し

夏休み特別企画
どろの遊園地 2014 ~子どもは遊びの天才だ~
光るどろだんご大会 2014

09 テラコッタパーク 夏の夜のコンサート シャンソン&マンドリンの夕べ フォトコンテスト 2014



地球上のすべての生命にとって、欠かせない「太陽」という存在。普通の暮らしでは、気にも留めないけれど、ある時は恋しかったり、ある時は疎ましかったり。そんな太陽を、日々、大切に考えて仕事をする人たちがいます。その人々を通して、少しでも、頭上に輝く太陽に、思いをはせてみませんか。

常滑から*

31

常滑 海岸物語



常滑市は伊勢湾の西側に面しており、海岸線は北の大野町から南の坂井まで約20km。市内には「大野海岸」「りんくうビーチ」「坂井海岸」の海水浴場があります。日本の海水浴の習慣は、「大野海岸」で鎌倉時代初期に、医療の一環として「塩浴」が行われていたのが記録上の起源といわれています。

中世から海運が発達し、常滑焼の大きめの甕や壺が、北は青森から南は鹿児島まで全国に運ばれました。明治以降、土管の運搬は、海運が主でしたが、鉄道が整備されると、徐々に陸上での貨物輸送に移行していきました。

常滑の中心地から少し外れた小鈴谷の海岸の干満差は約2m。潮が引くと沖合約500mの干潟が現れ、潮干狩りのシーズンになると、家族連れで賑わいます。たまには、海に癒されるのも、いいものですよ。

中齋紀夫(企画担当)

* INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。



エピソード



エピソード

大崎秀樹さん
株式会社萬秀フルーツ
代表取締役
1979年生まれ。大
学卒業後、家業のミカ
ン栽培に携わる。
2008年農業生産法
人設立。希少価値が高
い国産グレイプフル
ーツ栽培を開始。社名は
父と自分の名前から一
字ずつとって命名。
2012年から販売開
始。収穫体験ができる
オーナー制度も行って
いる。

愛知県知多半島。大崎秀樹さんは、温
暖な気候と豊かな日照時間を生かして、
日本ではめずらしいグレイプフルーツ裁
培に取り組んでいる。亜熱帯気候のフロ
リダ、広大な農地で栽培されるグレイプ
フルーツ。その栽培方法をそのまま日本
で応用することはできない。「ここに適し
た方法を見つかる」。それは、温室ミカン
栽培農家の若き2代目の教科書のない挑
戦だった。

もうだめだと切った木もあれば、実つ
ても酸っぱくて食べられず廃棄したこと
も。温室で栽培するのは、病気を減らし
薬剤の使用量を抑えるため。そして何よ
り太陽の光を最大限生かすためだ。8年
をかけた試行錯誤の末、ようやく軌道に
のった日本産・知多ブランドのグレイプ
フルーツは、海外産にないフレッシュ感
や、防腐剤やワックスを使わない安心感
から、多くの消費者の心をつかんだ。

「グレイプフルーツには、とにかく太陽
の光が大切。常に光が多い状態がベスト。
日を浴びてハウスの温度も高くなれば光
合成がどんどん進んで糖度が増す。ある
時期に光と水を制限するミカンとは、まっ
たく違ったんです。夏場には50度近く
になるハウス。それでも「日が照ってくれ
ればうれしい。天気がいいと仕事も前向
きになれるしね」と、日を浴びて輝くグ
レイプフルーツを愛おしそうに見つめた。



1 5月、ハウス
の中はグレイプ
フルーツの花の
甘い香りに包ま
れる。
2 大きな実が房
状に実るグレイプフルーツ。見
た人はみんな歓声をあげる。
3 切った瞬間から果汁があふれ
出すほどジューシー。防カビ、防
腐剤、ワックスを使用していな
いので、ジャムやビールなど加
工品づくりに取り組んでいる。

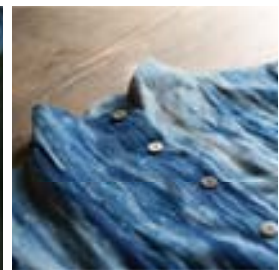
太陽をつかまえる

2



粕谷和弘さん
染色家
「天然色手染工房はち
はち」主宰。
1967年兵庫県生まれ。
1994年会社退
職後、海外の旅で染め
に出会い、独学で染色
を始める。1996年
京都を中心にオリジナ
ルブランドを展開。
2000年から毎年常
滑市「常滑屋」で個展。
2009年兵庫県播州
山崎に工房を移転。

「プロセスさえふめば、だれがやっても
色は染まる。その色をいけばいい状態
で、落とさないように残すのが技術。そ
のために、お日さんと水は絶対に必要な
んです」と、粕谷さん。
白い生地を染料につける。それを上げ
て、水で洗う。「濡れているから光が乱反
射して、きれいですよ。しかし、太陽に干
すと色は褪めてしまう。また染めて干す。
その繰り返しで、少しずつ色が濃くなっ
ていく。「最後に洗って干して、「あっ!
これでええわ」と自分が納得のいく色が
出たとき、いちばん感動します」。
その瞬間を、太陽が見守っている。



1 曇りの日、風のある日。その
時の天候で、布が思いがけない
表情を見せるのも魅力の一つ。
強い風ではためいた布と太陽が
作り出す縞模様、雨粒が滴のよ
うに垂れた跡、透明感ある輝き
をもってそよ風になびく布！
2 毎年、常滑で行ってきた個展
に、今年は地元「知多木綿」
を染めた作品を出した。「昨年、
機会があって、良い織元と生地
があることを知りました。日本
の文化を守るために、日本の布
を使って表現していきたい。」

1



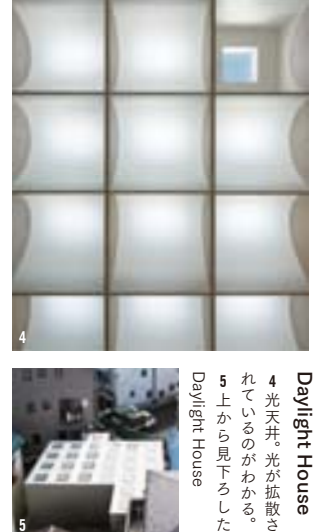
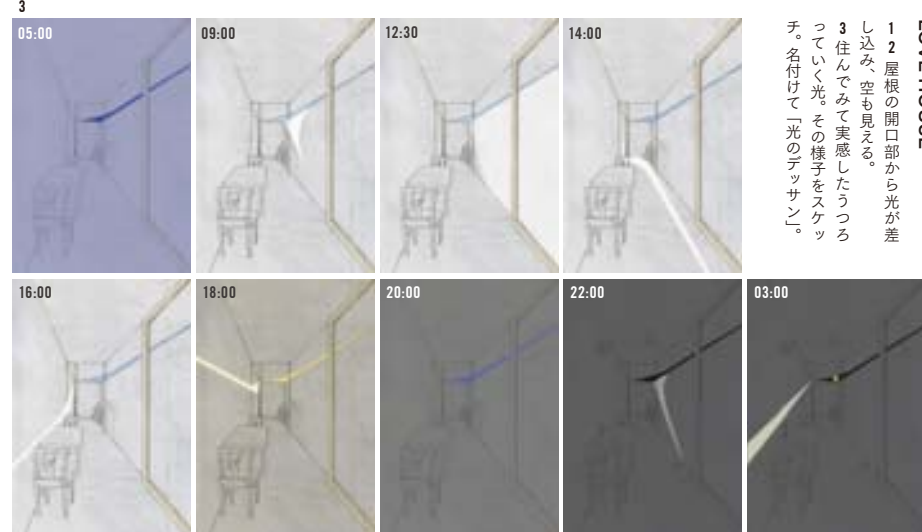
太陽が色を出す

太陽と対話する

保坂猛さん
建築家
1975年山梨県生まれ。2004年保坂猛建築都市設計事務所設立。08年東京建築士会住宅建築賞「LOVE HOUSE」、2013年日本建築仕上げ学会賞作品賞「ほうとう不動」、2013年度JIA 新人賞「Daylight House」など受賞多数。豊かな発想による建築は海外でも高い評価を得ている。



LOVE HOUSE
1 2 屋根の開口部から光が差し込み、空も見える。
3 住んでみて実感したうつろっていき光。その様子をスケッチ。名付けて「光のデッサン」。



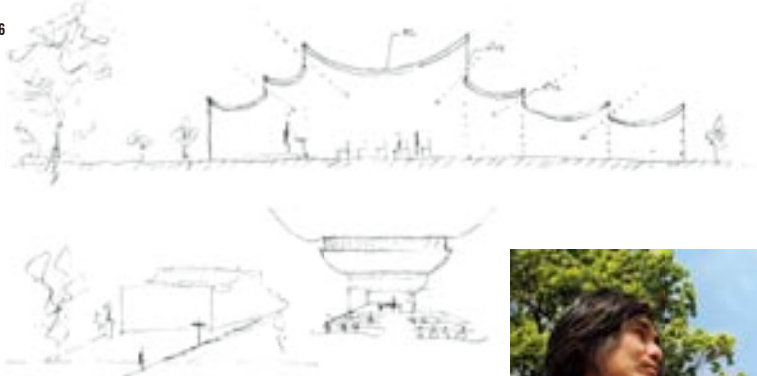
Daylight House
4 光天井。光が拡散されているのがわかる。
5 上から見下ろした Daylight House

始まりは10坪ほどの敷地だった。建築家、保坂猛さんは、その土地に立って考えた。「一見、恵まれていないような敷地だけど、自然の要素はすべてある」と。10坪でも100坪でも同じように太陽の光は降り注ぎ、雨は降り、風はそよぐ。ならば屋根に奥行いっばいの曲線による開口部を設けて、空を、光を、すべての自然の

要素を楽しむ家にしよう。自然に愛される家だから「LOVE HOUSE」。こうして保坂さんはこの家に暮らし始めた。住んでみると想像以上に太陽の動きを楽しみ自分がいた。空がしらみ始め、夜が明けて朝日が差し込む。正午には壁一面が光に照らされ、夕暮れに向かってその光が少しずつしぼんでいく。時計がなくても、差し込む光のかたちで時間がわかる。そんな様子を「光が遊びに来てい

るね」と夫婦は語り合った。「空気が澄みきった日、湿気がある日、光もくつきりしたり、ぼやけたり。周囲の植物とも絡み合って、光は見るたびに表情を変える。それって素敵なこと」。保坂さんにとって太陽は、建築設計のなかできちんと向き合いたい特別な存在になった。

密集地に建つ「Daylight House」は、屋根に29ものガラスのトップライトを設け、その光をボールト型のアクリル板で拡散させて、家中余すところなく行き渡らせた。夜明けから日没まで光を感じるその家を、住人は「夜空の下、家族みんなで草原に寝ているようだ」と表現した。「湘南キリスト教会」では、礼拝の時間は1年を通じて、直射光ではなくやわらかな天光で祈りが捧げられるように、礼拝が終わると直射光が壁面に光線を描くように、365日の光のシミュレーションによって太陽の光を見事に使い分けた。「太陽って、やっかいな奴なんです。でも一生懸命にアプローチすれば、まだ誰も知らない太陽との付き合い方が見つけれられるはず」。保坂さんは、これからも太陽との対話を楽しんでいく。



湘南キリスト教会
6 建築を考えるとときは、その敷地でスケッチを描き「空想」という保坂さん。建物は、6枚の曲面屋根がさまざまな高さにかかって、屋根と屋根の間から自然光が入るといふもの。「現実的な問題をたくさん抱えながらも、それに負けずに空想し続ければ、やがてすばらしい建築が発見できるはず」。その空想が、緻密なシミュレーションのもと、形となった。どれも考えたことがないような「光」を発見した。



7 礼拝が終わる時間になると直射光が差し込む。(写真は建設時)
敷地の緯度経度、建物の形を入力し、全月の朝8時から30分おき、礼拝時の10時~12時は15分おきに光の入り方をシミュレーション。着工時には模型と人工照明でも試して微調整を繰り返した。